7 MONTHLY MAGAZINE
NEW-LIFE

7月号　平成21年6月20日発行　毎月1回20日発行
昭和36年7月18日　第三種郵便物認可

ニュー・ライフ

2009
320yen.

Magazine for Your Life

森のようちえん全国ネットワーク
回覧
持ち出し禁止

猛暑の中で

ノウゼンカズラは中国から渡来した植物ですが、日本の寺院に似合う花です。濃赤の花は真夏の強い光を受けて咲き揃います。人影も疎らな寺院で木陰に佇み、蝉の合唱に囲まれて眺める時、静寂感と清涼感が得られ暑さを忘れてしまいます。

教育の広場
「森の幼稚園」は五感のゆりかご
—子どもたちの豊かな感情を育むために—
ニュースロータリー
日本の少子化問題は「国家存亡」の危機
医療事情のウラオモテ
回虫博士の世界漫遊紀行
たかが　われらが日々？
女性ホルモンの神秘と効用
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？
あのときこんなこと
どれみの鼻歌
なまずのひとりごと
食と健康
ダイエットに最適な健康食品「魚介」の効用
どこに憩うか—温泉
—日本の島の湯宿巡り④—
リビング特集
老後の選択　二戸建てからマンションへ①
LIBRARY

教育のひろば

「森の幼稚園」は五感のゆりかご

―子どもたちの豊かな感情を育むために―

教育ジャーナリスト
池田知隆

森の中で開かれた「焚き火カフェ」
（「森のようちえん全国ネットワーク」提供）

森に入ると、心がほっと安らぎを、癒されていくような感覚にとらわれる。子どもたちは五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）が刺激され、感情が敏感になり、喜怒哀楽がほとばしる。そんな森の教育力を生かそうと、いま、「森の幼稚園」という試みが全国に広がっている。特に子どもたちのコミュニケーション能力が高くなることに熱い関心が注がれている。「森林療法」や「森林セラピー」という言葉も耳になじんできたが、子育てにおける「森」の役割について考えてみたい。

―私が森へ行ったのは、思慮深く生きたかったからだ」

新緑が美しい季節になると、米国の作家、H・D・ソローの「森の生活」の一節が浮かんでくる。「死ぬときになって、自分が生きてはいなかったことを発見するようなはめにおちいりたくなかった」（岩波文庫）

森の中は、外とは違って緑の光が多く、目にやさしい。木々の葉が風にそよぐ音、小鳥のさえずり、せせらぎの音が心を和ませる。木漏れ日を浴び、木々の間を歩き、自然と向き合ううちに自分を見つめさせられる。

そんな森の存在を教育力として活用しようという「森の幼稚園」とはどんなものなのだろうか。

春には、物静かな先生が、子どもといっしょにスキップを踏みながら森の中を歩き、草花を摘んで冠をつくり、子どもの頭を飾ってやる。

秋になると、澄んだ青空が広がり、梢の先に広がった青空を、子どもとともに眺めながら宇宙の話をする。

冬、雪が降れば、尻当てのクッションに身を寄せあいながら、先生も子どもも団子になって坂の上から一気に滑り降りる。

生き物として、柔らかな心を持つ子どもの時代に、自然が与えてくれるものがいかに豊かであるか。自然の中で過ごす経験がいかに素晴らしいものであるか。

デンマークの「森の幼稚園」を紹介した写真集「さあ森のようちえんへ」（頭脳集団ぱるす出版）で写真家、石亀泰郎さんがそう書いている。森の中で、子どもたちは「これはダメ」「もう時間だから」といわれることはない。森の世界に溶け込んで遊んでいる子どもたちの愛らしい笑い声や歓声が写真集の中から聞こえてくるようだ。

インターネットを開いてみると、「幼児期は心の土壌をたっぷり耕す時」と考え、野外保育に力を入れている幼稚園は日本国内にも少なくない。2007年春、「森のようちえん」として再スタートした大阪市住之江区の「森のようちえん　どんぐり」。西住之江幼稚園（1968年設立）を前身に、幼稚園教諭や保育士たちが子どもたちが個々のペースでゆっくりと成長していける環境づくりを目指してきたが、いまでは園舎を持たず、自然との関わりが少ない都市部の子どもたちと近隣の里山などに出かけ、保育をしている。

こんな案内をだしているところもあった。

「ネコバス組（0歳～3歳未満）…親子一緒に森に入ります。

トトロ組（3歳～7歳くらいまで）…子どもだけで森へ入ります。

自然の中でリラックスして育児相談などの子育てカフェも併設」

宮崎駿監督の人気アニメ映画「となりのトトロ」にすっかりあやかって、運営している。森には子どもたちの心を浮きたたせるものがあるのは確かだ。

海の恵み　にがりを残した
はかた
伯方の塩®
※伯方の塩®は、自然の風と太陽熱で蒸発結晶させたメキシコの天日塩田塩を日本の海水で溶かして原料とし、CO_2の排出を少なくしています。
伯方塩業株式会社
〒790-0813　愛媛県松山市萱町4丁目-4-9
TEL089-911-4140(代)　FAX089-923-9671
ホームページ　http://www.hakatanoshio.co.jp/

◎デンマークから始まる

この「森の幼稚園」は、よくドイツの例が紹介されるが、発祥の地はデンマークだ（前号でとりあげた「生きている図書館」（living library）もデンマークで始まった）。1952年、コペンハーゲン北部の町、ホルテに住むエラ・フラタウ（Ella・Flatau）さんという一人の母親が「自然の中で子どもをのびのび育てたい」という思いから始まったといわれる。

フラタウさんは森が大好きな自然と遊ぶ名人で、自分の子を毎日近くの森に連れて行き遊んでいた。それを見ていた近所の人たちが「自分の子どもも一緒に」と頼み、子ども4人を集めた自主運営方式で開園した。

現在、デンマーク国内には園舎をもたないところと、一般の保育園が「森の幼稚園」を併設しているところがあり、約70カ所以上を数える。デンマークの公的な保育制度の中で確立し、義務教育にもこの活動が評価され、カリキュラムの中に取り入れられているそうだ。

その教育目標は、子どもに日常的に自然を体験させ交わらせること、自然に対する観察力を身につけ、運動能力、五感、言葉、想像力、自立性、協調性を育むことを掲げている。子どもたちは幼い頃から、森の活動を通して、自己決定には自己責任が伴うことを生活感覚として身につけながら育っている。

（森の中で遊ぶ子どもたち＝以下の写真は「森のようちえん、どんぐり」提供）

森のすべてが遊び道具

ドイツでは「森の幼稚園」は1968年に開園し、急激に広がったのは90年代半ば過ぎから。現在はドイツ全土で300以上になる。

ドイツの場合、一般的に園舎を持たず、毎日森へ出かけていくスタイルが多い。さらには、大人が与えるカリキュラムやプログラムもないのが一般的だという。

暑い日も寒い日も、雨が降っても雪が舞い散る日でも、子どもたちは森にでかける。森に備え付けの遊具はなく、子どもたちは木の棒や草・土・枯葉などを使って思い思いに遊ぶ。想像力さえあれば、森にあるすべてが遊び道具というわけだ。

自由に遊びことを知らない子も初めのうち戸惑ってはいるが、すぐに慣れる。先生による絵本の読み聞かせ、輪になってのお遊戯のほか、小さなナイフを使って木を削って遊ぶこともある。

トイレは森の中で済ませる。大便は簡単な穴を掘り土をかぶせてしまえば、それで終わり。半年も経てば、自然と土に返る。ただ森の中では着替えをするのが難しいため、お漏らしをする子どもはあまり受け入れていない。

肌で感じる自然

そこではもっぱら、「悪い天気」はなく、ただ「悪い服装」はある、という考え方をとっている。雨が降ろうと、氷点下の寒さになろうと、それに合わせた服装をすれば、森に入って活動できる。そして、雨の日にしか見られない自然の姿、氷点下だからこそ出合う自然の厳しさを子どもたちは肌で感じとっていく。

子どもを森まで送り迎えしていく保護者は、環境意識が高い。子どもたちは森の中では冬でも温水を使わず、手を洗うポリタンクの水は外気温と同じ。家庭ではいつでも使える電気や温水も「決して当たり前ではない」ということを子どもたちに理屈抜きで体験させることで、幼な心で「環境と社会生活」の関係を学ばせていこうとしている。

保護者の職種としてはエンジニア、教師、医師、自営業者などの割合が普通の幼稚園より高く、あまり貧しい家庭はなく、中流以上が多くを占めている。比較的、他の幼稚園よりも人気が高いため入園が難しく、幼稚園の活動に熱心に協力する家庭の子どもほど優先されているという。

ドイツでは日本と同様、小学校は義務教育だが、幼稚園に通わせるかどうかは保護者の自由。ただ森の幼稚園は園舎の維持管理や上下水道の補助を必要としないため、自治体にとっては大変安上がりだ。その分、先生の人件費を全額補助するなど、別の面での補助が手厚いという。まだ社会的には「ちょっと変わった幼稚園」と考えられているものの、これから徐々に増えて行くとみられている。

学習面での遅れは

それでは日本では森の「教育力」はどのように生かされているのだろうか。

〝環境教育〟や〝里山の保全〟が関心が集まってきているいま、「森の幼稚園」から学ぶべきことは多い。すでに日本国内でも、山や森、海や川、都心の公園などの恵まれた自然を生かし、保育の場として活用している「森の幼稚園」も少なくない。園舎を持たない自主保育の団体や、園舎があっても積極的に戸外で遊ぶ幼稚園や保育園から、自然学校が乳幼児を対象に繰り広げているところまで、そのスタイルはさまざまだ。

近年、人間の成長過程の中で乳幼児期の体験がとても大切であることが分ってきた。特に零歳〜3歳までの親子の会話、3歳〜5歳までの体験活動が脳科学の研究からも重要な影響を与えることが明らかになっている。その点で森の「教育力」はもっと見直されていいのかもしれない。

森の中で、先生は子どもたちの遊びに干渉せず、ただ見守っている。子どもたち自身が物事を行うことを促し、やり遂げることのできるだけの時間を十分に与える。森へ出かけるための準備なども子どもたちは自分で行い、先生の手を借りることはない。

多くの子どもたちは、泣き出したりだだをこねたりということはなく、笑いながら困難を楽しんでいく。さらに、子どもたちは自然の中で自由に遊ぶことで、危ないこと、やってはいけないことなど、さまざまなことを経験し学ぶ。

「森の幼稚園」の訪問者が特に驚くことは、子どもたちの忍耐強さと大人たちの辛抱強さだ。子どもたちは森の中の不便な道のりさえ、自らの力で乗り越え、先生はその姿に手を差し伸べたくなる気持ちを抑えて辛抱強く見守る。保護者に求められているのは、そんな保育方法への信頼だ。ひいては、子どものケガなどに対してもある程度の理解を示さなければならない。

こんな保育方法で育てられた子どもは、精神的に落ち着いた行動をとるようになる。幼い頃の自然へのふれあいや森での動植物を思いやる日々を通して、身体能力やコミュニケーション能力、創造力を養うことができている。その結果、通常の幼稚園児に比べても「表現力が豊か」「コミュニケーション能力が高い」「体が丈夫」「情緒が安定している」といった特徴がある。

ただ、その一方で、文字や数字に触れる機会が少ないので小学校に上がると遅れをとりがちな面もある。そのことに不安を抱く親たちも少なくない。

しかし、その差は数カ月で埋め合わせができるという。むしろ学校に入ってからの成長を見てみると、森の幼稚園を出た子どものほうが、学習面、社会行動面、身体能力と様々な面で成長

がよいと言う結果が出ている。就学年齢に達した段階での多少の学力差より、長い人生の基礎となる幼児期を豊かな自然で過ごすことの大切さを保護者としてしっかりと認識しなくてはいけないようだ。

「全国ネットワーク」から

このような「森の幼稚園」の試みは日本各地で広がり、2005年からは「森のようちえん全国ネットワーク」による全国交流フォーラムも開かれている。同ネットワークでは「森のようちえん」を次のように定義している。

・・・